

現代中国の仏教復興

上海市の寺院調査から

池上良正

本稿の目的と視点

本稿は、文科省科研費による共同研究『中国東南部における宗教の市場経済化に関する調査研究』（代表者・佐々木伸一）のメンバーとして、二〇〇三年から二〇〇七年に実施した調査研究の一部を報告するものである。¹⁾ 筆者の調査はすべて中部大学の黄強教授との共同調査として行なわれ、現在も継続中である。本調査の目的は、経済成長と市場化が進む中国沿岸部における宗教復興、とりわけ仏教寺院の目ざましい復興の現状を探ることにあつた。本稿ではその代表例として、上海市の仏教寺院に焦点を合わせる。

ところで、現代中国の仏教復興を考えようとするとき、大きな柱として、少なくとも三つのファクターを考慮する必要がある。すなわち、**国家政策の動向**、**個別寺院の経営への取り組み**、**寺院復興を支える一般信徒や都市住民たちの宗教的ニーズ**、である。

では、「文化大革命」期の極端な宗教弾圧以後の、国家政策の動向が問題になる。とくに公認宗教に対

する許容期を経て、一九九二年に鄧小平が「社会主義市場経済政策」を提唱して以降は、一部の「宗教」はたんに「黙認」できる必要悪というより、むしろ経済成長の推進役、ないしは人民統治の有効な手段として、これを積極的に「活用」しようとするような政策転換の側面もみられる。公式見解として表明されているわけではないが、「宗教」とは認められていない民間の巫俗なども、二〇〇〇年代に入ってから、むしろ地域の「民間信仰」などとして許容する政策に変わってきたとい²う。

は、仏教寺院の経営への取り組み、ないしはそれを運営する仏教徒自身の復興に向けた実践、というフアクターである。国家・政府による政策的支援から、「三自（自治・自養・自伝）」を原則とする自立段階に入り、社会全体の市場経済化が進むなかでは、宗教施設である寺院といえども高度な経営手腕が求められる。とりわけ発展が著しいとされる都市部の寺院では、たんに旧来の伝統を墨守・再興するといっただけではなく、新たな社会変化や住民のニーズに応じたさまざまな創意工夫による試みが目立つようになってい³る。そこで、「全民皆商」と称されるような、文化的・時代的気風に支えられた斬新な才能が発揮される機会も広がっている。

は、寺院復興を支える居士（在家信徒）や、都市住民たちの宗教的ニーズというフアクターである。官や行政がいかに宗教を保護・優遇し、宗教団体がいかに施設を整備して多彩な救済財を用意しても、それを求め、寺廟に足を運ぶ多くの一般庶民の需要がなければ、大規模な宗教復興など起こりようがない。そこでは、人々が現代の寺院に何を求め、どのような動機づけによってその復興を可能にするような人的・経済的支援を行なっているのか、といった問いかけが重要になる。

これら三つのフアクターは、独立した静止的な因子ではなく、つねに緊密かつ複雑な相互交渉のなかにあ

る。たとえば自主的・内発的にみえる住民のニーズも、「宗教伝統」と総称されるような在来の文化的様式性を基盤としつつ、国家の政策や、それにもとづく公教育に枠づけられて成型されているし、政府の宗教政策自体もまた、揺れ動く住民のニーズにたえずセンサーを向けながら、針路の微調整に腐心している。地域に展開する個別寺院は、国家機関や地方の宗教局などの監視や統制に機敏に対応し、あるいはそれらの利権や権力闘争に巻き込まれつつ、それぞれの実状に見合った生き残りの道を模索している。いくつかの先行研究が明らかにしてきたように³⁾、ここでは個別の仏教者の活動や、党や政府機関との媒介項として機能する中国仏教協会をはじめ、グローバル化のなかで関与の度を高めている海外華僑の団体、世界各地の仏教団体などの活動が、複雑に入り組んだ影響を及ぼしてきた。他方で、個別寺院はまた、一般信徒や住民の多彩なニーズに応えるかたちで、さまざまな救済財を提供するための戦術を駆使している。

現代中国の経済先進地域における仏教復興をとらえるには、このようなファクター間の相互作用が交錯する動態に目を向ける必要がある。宗教学の視点から民俗・民衆宗教の実態に関心をもつ筆者の立場からすれば、最も解明してみたいのは、のファクター、すなわち一般民衆が僧侶や仏教寺院に寄せる期待やニーズである。従来の研究で「現世利益的」「呪術的」などの用語で安易に括られてきた事象を、現実の文脈に即して掘り下げる努力が必要だと考えている⁴⁾。

東アジア全体に広がる現象として筆者がとくに注目しているのが、いわゆる「死者供養」的な観念や実践と仏教寺院との深い結びつきである。教義や思想中心の従来の学術的「仏教研究」からは軽視されがちだった「死者供養仏教」の広がり⁵⁾と、その重要性を指摘するとともに、近年の東アジアでは、たんに「歴史的伝統の根強さ」といった言葉には還元できない、新たな展開がみられることにも注意を向けたい。

表1 上海市における仏教の変遷

1912～1949年	(中華民国時代) 多くの僧侶・居士たちが上海市に入り、近代仏教の中心地のひとつとなる。
1949年	僧侶：3,299人(僧1,771、尼1,528) 寺院：1,950(区部320、校外1,630) 民家を借り受けた小寺・庵も含む。
1958年	僧侶：1,945人、寺院：1,119
1965年	僧侶：944人(僧347、尼597) 寺院：339
1966～1976年	いわゆる「文化大革命期」。寺院は閉鎖、破壊。
1976年	僧侶：28人(いずれも老僧)
1979年	改革開放経済へ。玉仏禅寺が回復される。
1980年代	19カ寺が回復。
1980年代	宗教活動場所の入場料・儀式料、土地、建物等の免税措置。
1992年	鄧小平の「社会主義市場経済政策」提唱。 寺院の積極活用と市場化。
1990年代	42カ寺が回復。
1995年	僧侶：494人
2002年	僧侶：884人
2004年	回復寺院：71

表2 春節(旧正月)の寺院参拝者数

1982年	約1万人
1990年	約20万人
1995年	約40万人
2002年	約60万人

表3 調査対象寺院

寺院名	回復年	僧侶数	寺院名	回復年	僧侶数
玉仏禅寺	1979年	僧120	松隠禅寺	1991年	僧11
龍華寺	1982年	僧50	真如寺	1992年	僧40
慈修庵	1983年	尼18	頤浩禅寺	1992年	僧6
圓明講堂	1983年	僧8	沈香閣	1992年	尼12
静安寺	1984年	僧30	青龍古寺	1993年	僧29
西林禅寺	1986年	僧17	法蔵講寺	1993年	僧13
仏教居士林	1987年	無	留雲禅寺	1998年	僧11
萬仏閣	1989年	尼28	七宝教寺	1999年	僧10
報国寺	1989年	僧20	蟠龍庵	2001年	尼3
長仁禅寺	1990年	僧3	圓津禅院	2002年	僧12
下海廟	1990年	尼28			

[表1、2、3は、黄強「上海市における仏教の復興と市場経済化」文科省科研費成果報告書(代表者・佐々木伸一)『中国東南部における宗教の市場経済化に関する調査研究』2007、の記述をもとに作成した]

り、戦前期には遠く及ばないが、確実な復調の道を歩んでいる。

一方、表2にみるように、寺院を訪れる参拝者の数も増加の一途を辿っており、むしろ僧侶や寺院の数がまだ少ないために、いわば供給過小、需要過多の状態にある。二〇〇二年の宗教職能者の平均年収は約二〇萬元で、これは市内の一般労働者の年収(約二萬元)の十倍にあたる。この「宗教職能者」には、キリスト教の神父・牧師・シスターや、道教の道士、イスラム教のアホン(宗教指導者)、仏教の尼僧なども含まれるから、男性の仏教僧だけを取り上げれば、平均年収はさらに高まると推測される。

市民のなかには、仏教寺院や僧侶があまりにも高額の収入を得ていることに対する非難や反発も聞かれるようになってきている。一般に日本以外のアジアの仏教では、僧侶の独身制が保たれているといわれるが、実質的には現代中国の男性僧侶の九割は妻帯している、といった告発的な新聞記事も出されている。⁶⁾このような市場経済化への過度の適応に対しては、仏教界の内部からも批判が出ている。一般にはこうした民衆のニーズを重視した路線は、中国近代仏教の改革者のひとりとして知られる太虚(一八九〇—一九四七)が提唱した「人間仏教」運動の延長上にあるとされる。他方で、同じく著名な仏教改革者で、居士たちの精神面での成長を重視した圓瑛(一八七八—一九五三)の路線を支持する立場からは、仏教界の現状に対する批判の声が強いという。いずれにせよ、近年の上海市の多くの寺院では、信徒や市民の宗教的ニーズに合わせた独自の救済財を開発することによって、さらなる経済的發展の道をめざす傾向が目立っている。

以下では、二〇〇四年までに回復された七一の寺院から、二一カ寺(表3)を重点的に選んで行なった調査をふまえ、とくに寺院経済を支えるうえで大きな役割を果たしていると思われる宗教活動のなかから、注目すべきいくつかの事例を紹介する。

水陸法会

数ある寺院の法会のなかでも、最も大規模なものとして特筆されるのが「水陸法会」である。教義的には、すべての亡魂・鬼神に施しをすることによって、その成仏を願う供養儀礼である。こつした万民への慈悲と、あらゆる衆生の成仏を願う行為を通して、施主の功德が高まる、という趣旨で行なわれる。日本でも過去に行なわれたという記録はあるが、ほとんど消滅している。しかし、中国では仏教寺院の重要な儀礼として発達した。原則的には七日間にわたって行なわれ、多数の僧侶が奉仕する。一家一門の現世での息災・招福や、先祖たちの供養などが総合的に祈られるのが一般的である。その功德はしばしば「冥陽両利」などの言葉で表現される。要するに、冥界（来世）と陽界（現世）を同時に利する、という意味である。多くの場合、寺院が日程を定めて施主たちを募集する「衆姓水陸法会」と、ひとつの家族ないし親族が施主となる「独姓水陸法会」の二種類が用意されている。衆姓水陸法会は寺の年中行事に組み込まれているが、独姓水陸法会の方は、申し込みがあれば一年のうちいつでも開ける。

具体例として玉仏禅寺の事例を取り上げる。この寺院は市の中心部に位置し、ひときわ大規模な寺院経営を展開している。文化大革命期にも「国家文物」という扱いで例外的に閉鎖されずに存続し、上海市の寺院のなかでただひとつ七〇年代に回復されたことから窺われるように、政府機関との太いパイプをもち、現在でも財政規模・僧侶数などの面において群を抜いた地位を誇っている。入場料も一〇元と市内の寺院では最高額である。この玉仏禅寺の衆姓水陸法会は春の清明の時期と、冬至の時期の年二回開かれている。清明と冬至は中国人が墓参りを行なう日として、現在でもこの風習は広く保たれており、この時期に水陸法会を

重ねたことは、この法会が死者の救済と深い関係をもつことを示唆している。

二〇〇六年度を例にとれば、清明衆姓水陸法会は農暦（旧暦）三月二日から八日（新暦三月三〇日 四月五日）、冬季衆姓水陸法会は農暦一〇月二六日から一月三日（新暦二月一六 二二日）であった。正式名称は「衆姓水陸空法会」として、「水陸」に「空」が加えられ、さらに広い衆生への追善回向が強調されている。ここでは施主として、さまざまな段階の名称をもった役割が募集されるが、二〇〇六年冬季の役割と価格表を表4として示した。

表中の人数はそれぞれの役割の定員である。当然、金額の高い役割ほど、受ける功德は大きいという論理になる。前年の二〇〇五年度の価格表では、禄字会首は三名、寿字会首は五名となっており、どちらも二〇〇六年度には一名増えている。また、二〇名による金字会首というのは無かった。おそらくこのあたりの需要が多いことから、総収入を上げるための改正が行なわれたのではないかと推察される。こうした高額の後援者に対して、「外壇蓮位・禄位」以下は一般信者向けのメニューになっている。たとえば供花や燈明の奉納なら百円で、多額の金が出せない庶民でも、こうした手頃な負担によって功德にあずかる道が開かれている。

衆姓水陸法会では、経師と称して経典を読誦する僧が八八名、さらに手伝いなどで参加する僧が四〇余名と決められている。これに対して、単独の施主の要望によって開かれる独姓水陸法会は、参加の経師は六六名、手伝いの僧四〇余名で、費用は四〇万円と設定されている。平均労働者の年収の二〇年分に相当する金額だが、じつさいにこうした独姓法会を依頼する富裕層が存在するのである。

あらゆる法会料金で玉仏禅寺は市内の最高額になっており、したがってこの寺院に法会を依頼することは、

表4 玉仏禅寺の2006年冬季の「衆姓水陸法会」価格表

水陸総会首(卍字会首)	1名	20万元	浄土壇爐主	16名	2000元
水陸副総会首(福字会首)	2名	10万元	外壇往生大牌位	若干名	1000元
水陸会首(禄字会首)	4名	8万元	上堂大齋		2万元
水陸会首(寿字会首)	6名	5万元	福慧齋		5000元
水陸会首(金字会首)	20名	2万元	如意齋		3000元
水陸会首(縁字会首)	50名	1万元	羅漢齋		1000元
水陸会首(善字会首)	30名	8000元	普仏		8000元
水陸会首(禧字会首)	30名	5000元	放生		5000元
梁皇宝懺爐主	30名	3000元	外壇蓮位・禄位	若干名	500元
楞嚴壇爐主	8名	2000元	外壇普利十方位	若干名	300元
法華壇爐主	8名	2000元	供花		100元
諸経壇爐主	8名	2000元	光明燈		100元
華嚴壇爐主	8名	2000元			

表5 留雲禅寺の「水陸法会」価格表

水陸法会功德金		
水陸総会首	限額1名	10万元
水陸副総会首	3名	5万元
水陸会首	70名	1万元
水陸護壇功德主	不限	5000元
水陸浄土位	不限	1000元
水陸福慧位	不限	1000元
水陸蓮位	不限	365元
水陸禄位	不限	365元
上堂大齋		1万元
吉祥如意齋		5000元
随喜羅漢齋		1000元
内壇鮮花		200元
内壇光明灯		500元
普仏		2000元

表6 圓津禅院の「水陸法会」価格表

水陸総会首一名	5万元
水陸副総会首二名	3万元
水陸会首二十名	1万元
水陸内壇吉祥如意位三十名	5000元
外壇延生禄位	120元(紙位牌・赤)
外壇往生蓮位	120元(紙位牌・黄)
外壇普利十方位	120元(紙位牌・黄)
延生普仏(随早課)	1200元
往生普仏(随晚課)	1200元
独姓放生	2000元
吉祥平安灯供奉(7日間)	100元
(内壇)吉祥平安符供奉(7日間)	60元

富裕層におけるひとつのステータス・シンボルにもなっている。それ以外の寺院では、同じ水陸法会でも、むしろ料金を低く抑えることで多様な民衆のニーズに対応している。表5は留雲禅寺、表6は圓津禅院の衆姓水陸法会の価格表である。最高額の会首の料金を玉仏禅寺と比較すると、それぞれ二分の一と四分の一に設定されている。圓津禅院の水陸法会のパンフレットには「二〇〇六年水陸空冥陽両利吉祥大法会」と大きく記されており、ここでも「水陸」に「空」が加えられ、「冥陽両利」の標語が用いられている。

留雲禅寺は市の中心から北西部の南翔鎮解放街にあり、昔は農村地帯だったが、都市化が進むなかで地域再開発の一環として復興された。寺の修復に合わせて周辺には新しいレストランや商店街が建てられ、門前の道路も新たに造られた。また圓津禅院は、郊外の有名な観光スポットとして知られている朱家角鎮にあって、外国人観光客も多い。レストラン、土産物屋が並び、観光地にふさわしい街並み、美しい橋や運河などが整備されている。寺院の格付けが明確に定められているわけではないが、一般的には回復年が新しい寺院ほど、また市の中心部から遠方の郊外に位置する寺院ほど、法会などの料金が安くなる傾向があり、まさに市場原理に即したランキングが暗黙のうちに形成されている。

二〇〇七年九月、筆者は松江区の西林禅寺において、「衆姓水陸法会」を見聞する機会を得た。この季節の衆姓水陸法会は珍しいが、当寺では地藏菩薩聖誕日の法会を兼ねて九月五日～一日（農曆七月二四日～八月一日）に行なっているという。境内の主要な建物に全部で六つの壇が築かれた。すなわち毘盧殿には内壇、大雄宝殿には大壇、葉師殿には華嚴壇、地藏殿には浄土壇、功德殿には諸経壇、観音殿には法華壇の六壇である。境内の一角には壇を守る守護神として壇前鎮守を祀っていた。各壇を設置する準備には一週間かけたとのことで、内壇には会首のための立派な席も用意されていた。ちなみに総会首は一名で一〇万元、副

会首は二名で二万元、水陸会首は八千元、内壇隨喜功德主は千五百元であった。

日々の経伝事

大規模な水陸法会に対して、単独の施主の依頼に依りて僧侶七名から一〇名程度が読経する法会があり、これはほぼ毎日、多くの依頼者がある。玉仏禅寺を例にとると、表7にみるように、午前あるいは午後に行なうもの（半天）、両方に行なうもの（全天）があり、また参加する僧侶の数によって細かく価格が定められている。たいていは一家の招福のため、あるいは先祖や特定の死者の供養を目的に依頼される。この読経儀礼への需要が多いことは、二〇〇五年度に比べて二〇〇六年度ではかなり値上げされていることから窺い知ることができる。二〇〇七年九月に尼僧寺の海廟で聞いた話では、こうした独姓の法会はず年に年内の予約は一杯で、今から申し込むなら来年になるとのことであった。

表7の仏事のうち、大悲懺（法）は、唐代に訳された「大悲心陀羅尼經」をもとに、複雑な経緯によって成立した儀礼で、現在では観音信仰を中心にしたものが多い。玉仏禅寺では千手千眼觀世音菩薩への礼拝とされている。一方、地藏經は輪迴世界に迷う衆生を助ける地藏菩薩關連の經典（地藏菩薩本願經など）を誦するもので、どちらも一家の先祖や身近な死者を供養する目的で依頼される。

とくに家族や一族に不運や災難などが続くとき、その災因として、先祖の祀りが不足しているのではないか、あるいは祀り手のいない死者が何らかのかたちで障りを及ぼしているのではないか、といった疑いがもたれることがある。こうした亡霊を供養するのにとくに適した法会が「焰口」である。仏教的名称としては「瑜伽焰口」で、餓鬼への施食をさす。歴史的には唐代以来「施食」とよばれていたものが、元明清時代に

は「瑜伽焰口」という名称が広く用いられるようになったとい⁽⁹⁾う。餓鬼道に墮ちた者を解放する儀礼という意味で「放焰口」ともいう。表8は玉仏禅寺の焰口の価格表である。ここでも二〇〇五年度と二〇〇六年度を比較すると、二割程度の値上げが認められる。表中の大師数とは、儀礼に加わる大師の数である。

玉仏禅寺が一般信徒向けに発行している案内書『功德無量』(二〇〇六年版)から、焰口の説明部分を紹介すると、餓鬼には三種類があるとされている。生前に比較的多く善徳を積んだ者は死んで「多財鬼」になる。民間で城隍とか土地神とよばれている神がこれに当たるとい⁽¹⁰⁾う。徳の少なかった者は「少財鬼」になる。ふつうの鬼、つまり一般的な死者である。これに対して、貪欲で吝嗇だった者は「無福無力の鬼」になる。民間で「孤魂野鬼」などとよばれてきたもので、これに施食するのが焰口であるとする。

もちろん、こうした鬼神の活動が生者たちの災いの原因になるといった災因論は、社会主義政権下では「迷信」の塊とされ、僧侶たちも公式の席で口にすることはほとんどない。しかし、じつさいにはどの寺院でも、焰口は一年を通して大盛況である。こうした儀礼の存続の陰には、民間の巫俗的な占い師や霊能者たちの活動も推測される。いわゆる「孤魂野鬼」「無祀孤魂」的な亡霊に対する信仰が、根強い支持基盤をもっており、仏教寺院がその解決法を仏事のかたちで積極的に提供している点に注目したい。

法会の時間帯としては、玉仏禅寺の場合、大悲懺は全天、地藏経は全天または晚上となつている(表9)。晚上とは、夕方から夜にかけての時間帯である。焰口はたいてい晚上に行なわれる。表9の式次第のなかで、「宣文疏」とは、寺院名や施主の名前などを読み上げ、儀礼が滞りなく行なわれたことを報告する所作をい⁽¹¹⁾う。また、「蒙山」とは無祀孤魂、つまり祀り手のない無縁の霊が集まる山で、これらを供養するための儀礼をい⁽¹²⁾う。宋代の不動法師「蒙山施食儀」にもとづく施餓鬼法会とされ、「放蒙山」という表現もある。日

表7 玉仏禅寺の経仏事、価格表（2005年と2006年の比較）

仏事項目	法師人数	2005年度価格	2006年度価格
半天経仏	7	1500元	2000元
半天経仏	10	2300元	3200元
全天経仏	7	2000元	2800元
全天経仏	10	3000元	4000元
大悲懺	10	4000元	5000元
地藏経	10	4000元	5000元

表8 玉仏禅寺 焰口儀礼、価格表（2005年と2006年の比較）

仏事項目	法師人数	2005年度価格	2006年度価格
一大師焰口	10	4000元	5000元
三大師焰口	20	8000元	10000元
五大師焰口	40	16000元	20000元

（一大師 4時間以上、三大師 4時間30分以上、五大師 5時間以上）

表9 玉仏禅寺の経仏事、式次第

半天経仏事		
第一支香	8:00 - 8:50	早課 靈前回向
第二支香	9:05 - 9:35	靈供 念仏
第三支香	9:50 - 10:40	金剛経 宣文疏 蒙山 靈前回向 送牌位
全天経仏事		
第一支香	8:30 - 9:10	早課 靈前回向 念仏
第二支香	9:40 - 10:30	金剛経 仏供 靈前回向
第三支香	1:15 - 1:45	弥陀経 念仏
第四支香	2:00 - 2:30	金剛経 宣文疏
第五支香	2:50 - 3:20	弥陀経 蒙山 靈前回向
晚上経仏事		
第一支香	5:15 - 5:55	早課 靈前回向 念仏
第二支香	6:05 - 6:45	金剛経 靈前回向
第三支香	7:00 - 7:30	弥陀経 念仏
第四支香	7:40 - 8:30	金剛経 宣文疏 蒙山 靈前回向 送牌位

本的表現でいえば、いわゆる「無縁ボトケの供養」である。「大蒙山」といって単独で行なわれる場合もある。玉仏禅寺の案内書では、たんに苦しむ死者を成仏させるだけでなく、それによって施主が大きな福を獲得できる点で、一般の焰口よりも功德が大きいとされている。

表10は、報国寺の経仏事価格表である。この寺院は市西端の淀山湖という大きな湖に面した場所に位置し、市の中心部からは車で一時間以上かかる。玉仏禅寺の下院（末寺）で、千年以上といわれる古木が名物である。もともとは小さな関王（帝）廟だったが、それを修復して仏教寺院とした。復興事業は一九八九年から始まり、百万余元を費やして九二年に三層の観音殿が落成。さらに増築を重ねて二〇〇一年に完成した。市の中心部からは不便な場所にあるため、先の玉仏禅寺に比べると低料金になっている。

こうした法会では、施主は正規の料金とは別に、住職や先導の僧侶に個人的な布施を渡す慣習もある。これらは政府に報告される寺院収入の数字にも含まれない。したがって、僧侶たちの年収は、公表されている数字よりもさらに高額である可能性が高い。

表10 報国寺の経仏事、価格表

半天経仏	法師人数7名	1500元、午前または午後
半天経仏	10名	2300元、午前または午後
経仏	7名	2000元、全日または晩
経仏	10名	3000元、全日または晩
大悲懺	10名	4000元、全日
地藏経	7名	3000元、全日または晩
地藏経	10名	4000元、全日または晩
一大師焰口	7名	3000元、晩
三大師焰口	20名	6000元、晩
五大師焰口	40名	16000元、晩
大蒙山	10名	3500元、午後
延生普仏	海衆	1200元
往生普仏	海衆	1200元
放生	7名	2000元

年中行事に組み込まれた法会

すでにみたように、衆姓水陸法会では一般市民に開かれた参加方法があるが、このように一般参加を原則とした定例行事はほかにも多い。玉仏禅寺を例にとると、清明と冬至以外の主要行事としては、農曆四月八日の浴仏法会、農曆七月一三 一五日の盂蘭盆会、農曆七月二八 三〇日の地藏法会、農曆九月二〇 二六日の觀音仏七、などがあり、いずれも百元から三百元ほどの料金で参加できる。このうち、目連救母の故事を典拠として営まれる盂蘭盆会から、地藏菩薩の誕生日とされる七月三〇日（または二九日）を中心とする地藏法会にかけての時期は、比較的新しい死者を供養するために多くの人が訪れる。それぞれの儀礼期間中は、死者の名を記した紙位牌が堂内に貼られる。個々の信者の負担は少額だが、多くの参加者があるため、寺の収入は大きい。

その他、農曆の除夜から正月一八日に開かれる元宵挂灯法会（功德金五〇 五百元）、農曆一二月八日に行なわれる釈迦仏成道吉祥沐恩法会など、枚挙に遑がないが、なかでも信者が集まることで特筆すべきは、農曆四月三 七日に開かれる千仏宝懺である。これは過去・現在・未来それぞれの千仏、合計三千仏を供養するという儀礼で、施主としては千仏瑠璃爐主一名が二万元、千仏福慧爐主が二名で六千元、千仏如意爐主が若干名で二千元という高額になっている。だが、ここでも多くの一般信者は、現世の福德を祈るために自分たちの名前を赤い短冊状の紙に記した「祈福延生蓮台位」、または、来世での成仏を願って死者の名前を黄色の紙に記した「超薦往生蓮台位」を購入して、儀礼の期間中に張り出してもらう。いずれも一枚につき二百元である。要するに、千仏の供養を通して、生者（現世）と死者（来世）の安定を同時に実現しようと

いう儀式で、宣伝文句として使われている「冥陽両利千仏宝懺」の語が、この儀式の趣旨を端的にあらわしている。

市の中心部にあつて玉仏禅寺と並ぶ名刹として知られる龍華寺でも、年間の大きい儀式といえば、清明・冬至の水陸法会のほかには、農曆七月の盂蘭盆会と、同じく七月下旬の地藏法会で、いずれも死者の供養を主眼とした行事である。地藏法会の中心は焰口儀式で、午後五時から始まり四時間ほどかかる。筆者が見学した二〇〇四年の例では、参加料は五百元。これを払うと儀礼が行なわれる講經堂に座席がもらえる。八百元出した人は、特別に僧侶の先導で上座に座らせてもらえる。三聖宝殿（本尊の弥陀と、勢至、觀音を祀る）内の本尊・阿弥陀如来像の裏側に、地藏法会用の壇が設けられて紙位牌が貼られる。二〇〇四年には「三九四枚だった。祭壇中央には横書きで「同登彼岸」、縦に右から「籍功薦拔赴蓮台」「慈雲覆被無分界域」「法雨普施沢及幽冥」「憑懺超生登彼岸」と大きく記される。奉仕の僧侶は五〇名くらい。講經堂（位牌堂）と本堂（三聖宝殿）の本尊裏側の壇で、それぞれ三〇分くらいずつ「阿弥陀讚」や「仏説大阿弥陀經」などの読經が繰り返される。地藏会の期間中は、親族のだれかが一度は儀礼に参加することが必要とされている。参加者の七割以上が女性だが、家族で来るために男性の同伴者も見られた。

参加者たちは、寺の境内で銀紙製の紙銭を詰めた赤や黄色の大きな紙袋を焼く。死者が来世で幸せに暮らせるように紙銭を焼いて送る風習は、中国では古くから多くの記録がある。紙銭を入れた袋には、「冥府先夫 冥用」「冥府先父 大人冥納」「冥府先祖父 祖母 大人冥納」「普利十方一切冤親債主無祀孤魂」「冥府兒子永生冥用早超生」などは氏名などの文字が書かれる。ここで「普利十方」とは、先の焰口と同じく、祀り手のいない鬼（無祀孤魂）への供養をあらわしている。つまり商売不調・病氣・家庭内のト

ラブルなど、生きていた人たちの不幸が、苦しんでいる死者（鬼）のためと考えられたときに書かれる。寺院側の公式見解としては、紙銭や紙の家、紙の船などを燃やすのは「迷信」であって、仏教では果物・花・線香を供えて、紙の位牌だけを燃やすのだという。しかし、現実には黙認状態で、むしろ当日は紙銭を焼くためのドラム缶が、境内に多数用意されている。

同じく市内の名刹として知られる静安寺では、年間の大きな法会として四つをあげて、広く市民の参加をよびかけている。すなわち、新曆三月末から四月初頭を中心にした清明法会、農曆七月下旬の地藏法会、農曆九月下旬の水陸法会、新曆一二月下旬の冬至法会、の四つである。静安寺が年ごとに発行しているパンフレットでは、この四大法会に参加することの意義と功德が、「仗仏慈光、陽泰陰超、現在者増福延壽、亡故者往生淨土奉告善信」というキャッチコピーで表現されている。

寺院の位牌などに用いられる赤と黄の色の違いは、一般には赤が生者、黄が死者をあらわす。しかし、地藏法会などで死者に送る紙銭を入れる袋には赤も黄色もあって、むしろ前者が多い。両者の区別に明確な規則はない。ある人によれば、赤は歳上の死者の場合、黄色は歳下の死者の場合だと言いつし、別の人によれば、赤は直接死者に送る場合で、黄色は地藏菩薩などの仏を介して死者の成仏を願う場合だという。こうした見解を全体として勘案すると、赤の場合はずでに「安らかな死者」になった者、すなわち成仏して安定した先祖や死者であるのに対して、黄色は「浮かばれない死者」、つまりどこか不安定で落ち着かない死霊のため、という通念があるように思われる。

表11は七宝教寺の年中行事を示したものである。この寺は市の中心部からやや西の郊外、七宝鎮という地区にある。古い路地の町並みと商店街を復興したものが、それに隣接した場所に地域再開発の一環として

一九九九年に建設された。制度的には龍華寺の下院（末寺）となる。かつて古い廟があったという記録があり、清末の太平天国の乱で焼失したというが、昔の寺で残っているのは二本の樹木だけである。文革の破壊からの回復ではなく、むしろ行政の保護のもとに新設されたという性格が強い。市民からは「七宝教寺は偽物の寺だ」といった陰口も聞かれる。そのためか入場料は三元で、「行事への参加料もかなり抑えられている。

表12は、青龍古寺の年中行事である。この寺も地域開発に連動して修復が進められているが、市西部の畑作地帯のなかに入り、いわゆる観光地とはまったく無縁の寺である。むしろ完全に郊外農村の精神的拠点として、復興がはかられてきたと思われる。儀礼に参加する信者も、すべてが近隣の企業や住民である。入場料は五元。境内には病気治しの神として知られる施相公の廟が、また寺に隣接した場所には古い塔がある。文化大革命後は、まったくさびれており、現在の三聖殿と、その前に小さな建物があっただけの田舎の寺だった。一九九八年に大雄宝殿を新築し、さらに一九九九年には天王殿を、二〇〇二年にはその両側に堂や施設の建物と鼓楼・鐘楼を、二〇〇四年には施

表11 七宝教寺、年中行事の参加料

2月6日（正月9日）	供天	会首200元、随喜位30元
3月30日 - 4月5日（旧曆3月2 - 8日）	清明報恩法会	大悲懺・会首500 - 1000元、随喜200元
4月28日 - 5月4日（旧曆4月1 - 7日）	衆姓水陸法会・七天	内壇・福位5万元、禄位3万元、寿位1万元、喜位5千元、縁位3千元、外壇・戒位300元、定位200元、慧位100元
5月5日（旧曆4月8日）	浴仏堂	会首500元、香花供養30元
8月8日（旧曆7月15日）	盂蘭盆会	随喜30元
8月21日 - 23日（旧曆7月28日 - 30日）	地藏法会	会首500元、随喜100元
11月7日 - 9日（旧曆9月17 - 19日）	観音法会	会首500元、随喜150元
11月21日 - 27日（旧曆10月1 - 7日）	衆姓水陸法会	内壇・福位5万元、禄位3万元、寿位1万元、喜位5千元、縁位3千元、外壇・戒位300元、定位200元、慧位100元

表12 青龍古寺、年中行事の参加料

2月5 - 11日（旧正月8 - 14日） 法華経法会	7日間	延生禄位	60元
3月13 - 20日（旧2月15 - 21日） 大悲懺法会	7日間	延生禄位・往生蓮位	60元
4月5 - 11日（旧3月8 - 14日） 清明 / 梁皇宝懺法会	7日間	往生蓮位・亡胎児	60元
5月5日（旧4月8日） 沐浴節法会		随喜功德	
5月11 - 17日（旧4月14 - 20日） 千仏懺法会	7日間	延生禄位・往生蓮位	60元
6月12 - 18日（旧5月17 - 23日） 受生経法会	7日間	延生禄位・往生蓮位	100元
7月12 - 18日（旧6月17 - 23日） 観音七法会	7日間	延生禄位・往生蓮位	50元
8月8日（旧7月15日） 孟蘭盆会			20元
8月17 - 23日（旧7月24 - 30日） 地藏懺法会	7日間	延生禄位・往生蓮位	60元
9月21日（旧7月29日） 三時系念法会		往生蓮位	20元
11月6 - 20日（旧9月16 - 30日） 観音七薬師懺法会	15日間	延生禄位・往生蓮位	80元
12月18 - 24日（旧10月28日 - 11月5日） 冬至衆姓水陸法会	7日間	延生禄位・往生蓮位	
		水陸總會首（1名）5万元、水陸付会首（2名）3万元、 水陸内壇会首1万2千元、内壇大牌位3000元、外壇大牌位1000元、 外壇普通牌位200元。	
1月5 - 7日（旧11月17 - 19日） 弥陀仏七法会	3日間	念弥陀声号晚上大回向	30元

相公の廟を新たに建てた。現在では殺風景な畑作地帯のなかにあつて、遠くからでも目立つ存在になっている。古い三聖殿は二〇〇七年から修築が始まっている。

この寺院で注目されるのは、清明行事の供養対象として「亡胎児」の語が見える点である。いわゆる水子供養である。最近では、「夜、夢で流産児が出て来た」などといつて供養に訪れる女性が多いという。近年になって供養行事のなかに水子供養を組み込むようになったという話は、他の寺院でもしばしば聞かれた。

萬仏堂と功德堂

玉仏禅寺では二〇〇〇年から、寺の裏手の、かつて病院だった建物を購入して、僧侶たちの居室、および参詣者が宿泊するためのホテルに改築した。建設費は約一億三千万円といわれている。この建物には上海仏学院という僧侶の養成学校も併設され、二〇〇四年度からは僧侶候補四〇名、尼僧候補二〇名を募集した。学費は無料で、勉強期間は三年間である。この建物の一階には精進料理のレストランもある。二階には喫茶室があるが、その横に「萬尊仏像」と称する金色の小仏像を壁面に並べた大きな堂が設けられ、覚群大樓と名づけられている。萬尊仏像には釈迦仏・薬師仏・阿弥陀仏・観音菩薩・文殊菩薩・普賢菩薩の六種があり、それぞれ千体ずつ、合計六千体が入るスペースが確保されている。

このように多数の小仏像を並べて、それぞれを信徒たちに頒布するという形式の堂を、一般に萬仏堂とよぶ。台湾や香港などの寺院ではすでに広くみられる。玉仏禅寺の仏像はかなりの部分が頒布済みで埋まっているが、まだ余地はあり、購入がよびかけられている。これも納める場所によって価格が異なる。金蓮界と名づけられた正面の三段目から五段目までが最高価格で、一体が五万元。最も安い場所でも一万二千元であ

る。平均価格帯は二丁三万円で、概算でも六千体すべてが頒布されれば、一億数千万円の収入が寺に入ることになる。建物全体の改築費用と同額か、それを上回る金額である。

見る者を圧倒するような小仏像が林立していることで有名なのが、奉城鎮にある尼僧寺の萬仏閣である。創建は明の初頭といわれ、初めは小庵だったが、明の洪武一九年（一三八六）に倭寇の侵入を防ぐための城を築き、その北門（海側）にこの寺を置いた。民国六年（一九一七）に当時の住持尼が大規模に拡張した。文革時代は倉庫に使われ、尼は離散したが、一九八九年六月に回復開放。九八年九月には仏学尼衆班を創始。現在では尼僧が約二〇人、学生が一〇人くらい学んでいるという。

ここの萬仏楼は大雄宝殿の奥にあつて、エレベータで三階にあがると、中央に盧舎那大仏が鎮座し、それを取りまくように小さな地藏菩薩の立像と、釈迦、觀音、文殊などの菩薩坐像が、フロアーの壁面いっぱい群立している。小仏像の総数は約七千から八千体である。萬仏楼は一九九八年から建設を始め、二〇〇三年一月二日に落成典礼が行なわれた。ここでも仏像はすべて信徒の寄付によるが、他の場所のように個別の仏像に名前を入れて頒布する形はとっていない。それをやると各自が自分の仏像の前だけで拜むことになつてしまふことから、寄付者はあくまでも全体の仏のなかの一体を寄進したという趣旨で、証明のカードを貰うだけある。そのため、一体の金額も六百元と少額に抑えられている。それでもすべての仏像の寄進はすでに完了したというから、総額では四百万円を越す寄付金が寄せられた計算になる。

こうした萬仏堂に対して、功德堂などの名称をもつ専用の堂に、死者の位牌を並べて供養することも、寺の重要な業務のひとつになっている⁽¹⁾。かつて中国の農村では一族の宗廟に先祖の位牌が置かれ、儒礼を基本とする祭祀が行なわれていた。現在では、一般の住宅に死者の位牌を安置することは少ない。都市部では死

者の誕生日や命日に写真を飾って線香を立てるなど、位牌よりも遺影が好まれる傾向がある。家の主婦が位牌などを室内に置くことを嫌うケースも多いという。そのため、寺院が死者の位牌を安置する場所を提供することが広く行なわれるようになり、市民の需要も高くなっている。

玉仏禅寺ではすでに八〇年代初頭には、功德堂に一般信徒の位牌を祀ることが復活しており、これまでに約一万枚の位牌が納められてきた。そのなかには死者の写真を添付したものも散見される。現在はほぼ満杯状態にあるが、五年ごとに管理費の見直しがあり、放置された位牌は撤去されて、別の人がその場所を使用できる。これらは最初に所定の金額を払って納めれば、一〇年間は管理費が免除され、それ以後も管理費を払いつづければ、百年間は堂内に安置して供養することが約束されている。堂の壁面に備え付けられた位牌棚は全部で一〇段あり、目の届きやすい下段の方が高額になっている。表13にみるように、これも二〇〇五年度に比べて二〇〇六年度では約五〇%も値上がりしている

さらに近年、この寺院では、かつて庫裡だった建物を新たな位牌堂に改築し、現在は新しい位牌を納める人を募集中である。旧堂に比べると、こちらの位牌は小ぶりだが、堂の内部にはエアコンも完備し、かなり明るい雰囲気になっている。また、位牌の前面に大きな写真立てを置いて遺影を飾る形式になっ

表13 玉仏禅寺・旧位牌堂の価格表

段数	2005年度価格	2006年度価格
1-3段目	2万元	2.5万元
4-5段目	1.5万元	2万元
6-7段目	1万元	1.5万元
8-10段目	7000円	1.2万元

(段数は下から上に向かって数える)

表14 玉仏禅寺・新位牌堂の価格表

段数	南向き	東西向き
1段目	4.5万元	3.5万元
2段目	5万元	4万元
3段目	5万元	4万元
4段目	5万元	4万元
5段目	4.5万元	3.5万元
6段目	4万元	3万元
7段目	3.5万元	3万元
8段目	3万元	2.5万元
9段目	2.5万元	2万元
10段目	2万元	1.5万元

ている。死者を偲ぶ「よすが」として、位牌よりも写真に重点が移ってきているとみることが出来る。新位牌堂の料金体系を表14に示した。南向き二丁四段目の五万元から、東または西向き一〇段目の一万五千元まで、実に細かな価格体系が設定されている。

この位牌堂は功德堂などの名称でよばれることが多い。萬仏堂と功德堂はともに需要が高く大きな収入源になることから、近年の上海市の大寺院などでは、両者を寺院の地下などにセットで増築することが、一種のブームのようになってきている。ある僧侶によれば、大きな萬仏堂と功德堂を併設すれば、それだけで巨額な収益が見込めるため、最近の寺院の建設復興事業では、建設費の借金は、すべてこのような二つの堂の収入で返済計画を立てるケースが増えているという。

郊外の留雲禅寺でも、大雄宝殿の地下に大規模な萬仏堂と功德堂が建設された。萬仏堂は大きな部屋が二つあり、それぞれ一万体の仏像が入る。片方はすでにほぼ満杯、もう一部屋が準備中だった。仏像一体を納める料金は二千元。納めるときには開眼儀礼をやってもらおう。願い事を書いた紙を仏像の胎内におさめ、願い事が叶ったらまた新しいのを入れるという。これは一家の守護仏として子孫にも残せることから、かなりの希望者がある。四月八日と二月八日に儀礼がある。一方、位牌を納めた功德堂は、まだ募集を始めたばかりである。位牌料金は、二〇〇五年が六千元、二〇〇六年は八千元、二〇〇七年は一万元と、急速に値上がりしている。大きい位牌なら二万元かかる。

青龍古寺の萬仏堂は地藏堂と称して、多数の地藏尊の小像が壁面全体に天井に届く高さまで並べられている。ここではすでに、すべての像が頒布済みになっている。そのため二〇〇七年には新しい萬仏堂と功德堂の建造が始まっている。萬仏堂では中央に大きな仏像が五体置かれ、一体が二五万元だが、それ以外の小

仏像は一体五百元と手頃な料金になっている。

位牌を納めた功德堂については、寺院ごとに工夫をこらしたアイディアが目立つ。たとえば真如寺には、塔の形をした位牌が普賢堂に安置されている。この寺院は工場地帯の労働者が多く住む街区にある。少し以前まで、ここは低所得層の住民が多い地域だった。寺の本堂は元王朝時代からの形式の木造寺廟で、革命後の一九五六年ころには、建物は倉庫として使用されていたが、九〇年代のはじめ、妙靈法師という、かつて玉仏禅寺の僧だった人が復興した。最初に大雄宝殿を造り、その後、それを模して前後に仏殿を建て、九層の方塔も建てたが、塔は大きすぎて他の建物とのバランスが悪いという住民の声もある。これらの建設資金はすべて信者たちから出ている。塔の場所はもとも小学校だったが、それを取り壊して建てた。児童数が減っていたので地元の政府も許可してくれたという。これらの建設事業は、都市再開発の一環として進められた。要するに、地域開発のシンボルの存在として寺院が活用されている例である。

この真如寺では、寺の象徴ともいべき塔を、位牌のモデルとしたのである。小さな板状の位牌はすべて九層方塔の形をとり、「仏光接引 往生蓮位塔」(は氏名)などの銘が書かれている。さらにこれが同じく塔の形をした筒型の大きなケースに納められている。一基(塔)のケースに約千六百個の位牌が納められ、全部で四基ある。入れる位牌は一年ごとに二百元で、延長も可能という。したがって、この塔位牌だけで、寺の収入は年間百二〇万円を超える計算になる。

七宝教寺では地下に大きな功德堂があり、墮胎児の供養もやっている。また、尼僧寺院である蟠龍庵の功德堂の位牌は、丸みを帯びた柔らかいデザインで、黄色の縁取りはしてあるが、全体は淡いピンク色で、それぞれに豆電球の灯りが点る構造になっている。いずれも死者の写真をはめこむことができる。このように、

萬仏堂にしても功德（位牌）堂にしても、都市住民の嗜好の変化を機敏にかぎとりながら、必ずしも旧来の様式にとらわれない斬新な救済財の「開発」が模索されている。

一年期紙位牌

上述した死者の位牌は、いずれも木製や金属製で、いわば半恒久的なものだが、奉納するには多額の費用を要する。これに対して、期限を区切って簡単な紙製の位牌を奉納するという、比較的安価な方法も用意されている。むしろ一般の市民には、こうした簡便な死者供養が手軽で人気がある。先にあげた孟蘭盆会や地藏法会などでも、その期間限定の紙位牌が用いられるが、そのほかにも「往生蓮池法会」として一年間の供養が約束される黄色の紙位牌は、多くの申し込みがある。これらの紙位牌は専用の堂（玉仏禅寺では客堂）の壁面に、びっしりと貼られ、一年後に剥がされ焼かれる。死者の写真を添えた紙位牌も増えている。玉仏禅寺での価格は、二〇〇五年度には一枚につき七百元だったが、二〇〇六年度は一気に千二百元に値上げされた。これに対応するものとして、赤の紙位牌に名前を記して、長寿や健康を祈る儀礼もある。この紙位牌は観音殿の壁面に一年間貼られる。「延生慈悲法会」と称して、やはり毎日受け付けている。価格は「往生蓮池法会」の場合と同じである。

龍華寺でも、蓮池法会で供養される一年かぎりの紙位牌を受け付けている。八二年に回復したときからあった木製位牌を納めた堂はすでに満杯状態で、現在は受け付けていない。紙位牌は、正面左側の「講經堂」という看板のかけられた堂（先に紹介した地藏法会が行なわれる場所）の内壁一面に貼られている。死者の写真を添えたものもあり、これは年毎に増えているという。一〇月一日から受け付けを開始する。料金は二

〇〇四年時点で一枚が五百元。二月一六日から入れ替える。赤色の延生と、黄色の往生がある。毎年一万件くらいの申込みがあり、往生が約六千枚、延生が約四千枚である。以前は往生が多かったが、最近延生が増えているという。

黄色の紙位牌のなかで「普利十方」と書かれたものが、五分の一くらいある。先にも触れたように、これはいわゆる無祀孤魂を供養するもので、家で不幸が続くような場合、こつた位牌を奉納することが多いという。「普利十方」位牌の奉納は、僧侶が示唆することもあるが、親族などから聞いてくる場合も多い。あるいは、ここでも巫者的な民間の宗教者や占い師の関与があるのかもしれない。実際、寺の正門の外には「占い」をするという女性たちがたむろし、しつこく「客引き」をしている。彼女たちの活動は非法法だが、一定の需要があることは疑いない。また近年では水子（胎児）の供養もかなり増えている。子供を運れた神像があり、これが水子供養の対象になっている。

静安寺では恒久的な木製位牌を「長久牌位」とよぶのに対して、紙の位牌を「一年期牌位」と称して、清明節からの一年間を、貼り出す期間と定めている。ここにも「普利十方」と書かれたものがある。二〇〇五年度の料金は、一枚につき千元であった。

上海圓明講堂でも、一年期の紙位牌の奉納が盛んである。ここは圓瑛大師と明暘法師の二人を祀っている。先にも触れたように圓瑛大師は中国の近代仏教を代表する名僧のひとり、日中戦争当時、抗日運動で迫害を受け、一九三九年にはインドネシアで日本軍に逮捕された。もとは天龍寺で活動しており、舍利は寧波にある。明暘法師はその弟子で、中国仏教協会の初代会長として国際的にも活躍した。やはり天龍寺で修行し、龍華寺の住職もつとめ、二〇〇二年に亡くなった。この寺院は制度的には龍華寺の下院（末寺）で、住職も

兼任しており、大きな儀礼は一緒にやる。将来重要な地位につくような若手の僧侶二〇名くらいが、常時ここで寝泊りして勉強している。

圓明講堂の一年期紙位牌に人気があるのは、二〇〇四年で二五〇元、二〇〇七年時点でも三〇〇元と、玉仏禅寺や龍華寺などの大寺院に比べ格安だからという理由もあるようだ。二〇〇四年の調査では、新暦の一〇月から受け付けを始めて、旧暦の正月に貼りかえ、前年のものは焼くということであったが、二〇〇七年には貼り替えの時期が清明となっていた。紙位牌に写真を添付するかしないかは自由だが、最近は増えている。写真を付ける形式はすでに五〇年前からあり、当時は親戚などが来ても分かるためといった理由が多かったようだ。一年期紙位牌の奉納は九〇年代から非常に増えているという。昔は年寄りだけだったが、最近では若い人も納めるようになった。九〇年代の経済成長期以前には、両親の生活はまだ苦しく、豊かになつた子供たちは、かつて苦労した両親がせめてあの世で良い暮らしができるようにと、寺院の供養行事に金を出すようになったという。

位牌の形式は「先父（母・夫・妻・兄） 蓮位ノ陽上 子（妻・夫）」が標準である。概算でいえば、両親を祀るものが半数以上で、祖父母が約二〇%、夫や妻などの配偶者が約一五%、兄弟、子供がともに約五%である。数は少ないが、友人や亡くなった人気歌手の位牌を納める例などもある。ここでもまた、商売不調・病氣・家庭内のトラブルなど、生きている人たちの不幸が苦しんでいる死者（鬼）のためと考えられたときには、「普利十方」の位牌を納める。最近はこれもかなり多く、全体の一割を超えているという。「普利十方 過去父母師長四生六道 一切冤親債主無祀孤魂」と書くことになっている。

さまざまな「商品開発」

近年の中国沿岸部における仏教寺院では、これまでに述べた儀礼・行事などの他にも、経済的に余裕の出た都市住民たちの宗教的ニーズを開拓するような、さまざまな企画が試みられている。ある意味で、それらは市場経済化に乗った寺院の「商品開発」競争、とみることもさえ可能である。

たとえば玉仏禅寺では、「汽車灑淨」と称する自動車の浄化儀礼を受け付け、近年の自家用車購入ブームに便乗して積極的に宣伝している。これは日本の神社の「車のお祓い」を模倣したともいわれている。儀礼の価格は、自動車の値段に合わせて変動するという徹底ぶりである。すなわち三〇万元以下の大衆車なら三千八百八十八元、三〇万から六〇万元の車なら六千八百八十八元、六〇万から二百万元の高級車なら九千八百八十八元である。いうまでもなく、端数に八が並ぶのは中国人が最も好むラッキーナンバーだからである。

さらに新しい企画として注目されるのが、大晦日に参拝客に鐘をつかせて料金をとる方法である。これはそもそも蘇州の寒山寺で一九九八年から、日本人観光客を相手に、大晦日に料金をとって鐘をつかせたのが始まりという。周知のように蘇州寒山寺は、唐の詩人張継の「楓橋夜泊（月落烏啼霜滿天）」で日本人には夙に有名である。この寺の除夜の鐘を聞くと十年若返ると言われ、毎年大晦日になると日本人観光客が多く訪れる。現在の寒山寺では、普段の日でも観光客に有料で鐘をつかせている。

近年では、上海をはじめ北京、南京、蘇州などの大寺院が大晦日の有料による鐘つきを取り入れている。ここでは観光客相手というより、地元の富裕層が対象であるが、多くの希望者が殺到する。たいていは百八回のうち、とくに一番目が最高額で、後になるほど価格は下がっていく。たとえば、北京の戒台寺では二〇

○五年に一回目の料金が五万元だった。しかし、上海市の龍華寺のように、一律三千元で、中国人が好む六回目と八八回目を六千元と倍にしている例などもある。百八回が終わると、その後は百元前後の低料金で一般の参詣者にもつかせることが多い。したがって、最近の大都市の寺では、一晩中、除夜の鐘が鳴っていると皮肉られている。春節（農曆正月）だけでなく新曆の正月にもやっていて、寺の大きな収入源になっている。

最大規模を誇る玉仏禅寺をはじめとして、上海の寺院には常設の鐘楼がないところも多い。そうした寺院では、ポータブルの鐘が用意されていて、大晦日にはこれを臨時に本堂脇にとりつける。元旦に最初の線香を立てさせて料金をとることもある。一番や二番だと数千円もとるが、早い順番を狙って多くの人が並ぶという。ホテルを経営している寺では、宿泊客に優先的に最初の順番を与えたりする。圓明講堂では、最初の鐘だけは僧侶がつき、あとの百七回は有料となるが、新年の第一番に線香を立てる料金は五千八百八元、最初の有料鐘つきは二千八百八元である。また、郊外の報国寺の場合には、一番目の鐘つきが一五八八元、二番目から百八番目までが一五八元で、百九番以降はすべて五〇元となっている。

ここでも最も高額なのは玉仏禅寺で、一番目につくための料金は八万八千八百八元で、それ以後の百七回も高額である。ただし、一回分だけは地域の身体の不自由な老人などを招いて無料でつかせるといふ。寺院が「金儲け」をしているという批判をかわし、慈悲の精神で公共の福祉にも貢献していることをアピールするものだが、百八回のうちわずか一回という数が、かえって市民の反発を呼んでいる。これに対して寺院側は、鐘つきの全収入を慈善事業に寄付したと反論し、二〇〇五年の寄付金額として五〇万元という数字をあげている。しかし、これも百八回の収入総額より低いことは明らかである。さらに巷の噂では、大会社が

数回分の権利を買いとって、政府高官を招待してつかせたりしているという。共産党の論理からいえば、こうした習俗は実効性のない「迷信」であり、鐘をついたところで実質的な利得にはならないので、「賄賂」として処罰することはできないのだという。しかし、寺院や大会社のやり方に批判的な市民は多い、という話も聞かれる。

ホテル経営に代表されるように、寺院が多角的な営利活動に乗り出している例は多い。精進料理のレストランや喫茶店、仏教関係の書籍、書画、仏像、線香などの販売である。業者に店舗を貸している部分と、寺院みずからが経営している部分とがある。静安寺では、境内の井戸水を「利益のある水」としてボトルに詰め販売している。大きな寺院でとくに力を入れているのが菓子の月餅の販売である。近年では、仏教寺院の月餅は植物油を使用して豚脂を使わないことから、健康的であるとして評判が良い。玉仏禅寺や静安寺などでは直営の月餅店に、さまざまな贈答用の詰め合わせが並べられている。

これらの企画や実践は、実体論的に規定された「宗教」「仏教」の範疇からは逸脱するものとして受け取られるかもしれない。「仏教」を標榜する聖職者や組織が、資本主義の市場原理に安易に乗っていくことに對して、嫌悪感を抱く人も多いだろう。しかし、民衆層に根づいた「生きられている宗教」に關心をもつ筆者などの立場からすれば、これらもまた時代と地域に見事に適応した広義の「救済財」である。党や政府の「宗教」綱領を巧みにすりぬけてしまう鐘つきのエピソード（「迷信」だから「賄賂」にはならない）などは、まさしく近代のエリートたちによって瘦せ細らされてしまった「宗教」「信仰」「救済」観を相対化していく、「生きられている宗教」「生きられている仏教」のたくましい潜在力が示された具体例といえよう。

寺院の遺灰堂

中国では儒教の伝統から長く土葬が一般的だったが、共産党の時代になって、すべて火葬とする政策に切り替えられた。上海市のような都市部では、昔から各一族の墓地は市の周辺部にあつたため、現在でも火葬された骨灰は壺などに収めて、そうした一族墓地や、新たに造られた公園墓地などに埋葬するのが一般的である。例外的に土葬が認められているのは、海外華僑とイスラム教徒だけである。イスラム教のモスクにあたる清真寺では、境内に信者たちの土葬墓が設けられている場合もある。しかし、ふつうの仏教寺院の敷地内には、墓のような施設はいっさい存在しない。日本のように寺院の境内に墓地や納骨堂など、死者の遺骸を収容する施設を設けることはない。ところが近年、こうした「常識」をくつがえすような事態が起こりつつある。といつても、上海市でもまだ二つの事例だけなのだが、ひとつは仏教寺院の敷地に隣接して墓地がつくられた松隠禅寺、もうひとつは寺院内に遺灰堂を設けた報国寺の事例である。⁽¹²⁾

このうち松隠禅寺には、松隠山荘という墓園が隣接し、すでに一万基をこえる墓がつくられている。最終的には二〇万基まで可能という。もとは国营施設として開発されたが、現在は半ば民営化され、半数以上の株を取得した女性が社長として経営している。この女性は仏教を信じることで病気が治ったことから、熱心な仏教徒を自認している。それぞれの経営母体は異なるものの、松隠禅寺は儀礼執行などにおいて松隠山荘と深く関わっている。上海市の墓園の現状については、他の事例とも合わせて、稿を改めて紹介したい。

報国寺についてはすでに何度か触れたが、この寺で火葬した骨灰を納めているのは、境内の一画にある玉仏功德楼という二階建ての建物である。現代中国では日本と同じく都市における墓地不足が進んでおり、遺

灰の安置場所に困る市民も増えている。これまでの寺院では、日本の都市部に広がっているような納骨堂を建設するなどという発想そのものがなかった。ところが、青浦区という市の西端部に位置するこの報国寺では、すでに遺灰堂の試みが成功し、多くの市民の需要に込んでいるのである。

報国寺の監院（住職）昌智氏の話によれば、玉仏功德樓の建設は一九九三年にはじまり、九五年から遺灰を受け入れ始めたという。最大の理由はやはり寺院経営のためで、この寺は当時、寺の収入が少なかったことから、香港の壁葬（ロッカー式墓）を取り入れたらどうかという話を持ち上がり、香港の会社が技術を持ち込んで最初の出資をしたという。遺灰堂も法律上は墓になるため、市の認可を得た運営会社が必要で、寺院が勝手につくることはできない。そこで寺とは別に、墓地運営のための合併会社を設立した。東南アジア、香港などの会社が資金を出し、報国寺も株の一部を所有した。したがって、玉仏功德樓は外観上は報国寺の一部だが、経営母体は寺とは別の企業体になっている。寺はかなりの株を保有しているので、そこから収入が得られる。こうした試みが実現した背景には、この寺が玉仏禅寺の下院にあたり、官との太いパイプをもっていたことも関係しているだろう。現在の住職の昌智氏も、ほかに上海市青浦区政協常委、上海市青浦区仏教協会会長、上海市青浦区青年連合会常委などの肩書きをもっている。

玉仏功德樓はいくつもの小部屋にわかれ、部屋ごとに小さな地藏尊が祀られている。壁面には約一五〇の遺灰を入れるロッカー式の木製ボックスが用意されており、全体では約三千のボックスがある。ほとんどが二人用（夫婦用）だが、一人用もある。また夫の横に先妻・後妻という三人の遺灰を納めた例などもある。ロッカーひとつを借り受けるための費用は安い所で四千〜五千元、一番よい場所（南向き中段で、地藏尊に近い）だと一〜二万元である。管理費は年間四百元。法律上はすべての墓と同じく貸借期間は七〇年と定め

られている。契約書では、管理費を支払わなければ通知のうえ処分できるとあるが、「無縁化」のトラブルはまだないという。寺では毎日線香を立てて拜んでいる。清明と冬至の期間には大勢の人が参拝に訪れ、遺族が供養儀礼を依頼するケースもたいへん多いという。

この玉仏功德樓の需要は高く、すでに満杯状態になったので、運営会社では第二期として、寺に隣接した土地に遺灰収納専用の三階建ての堂を建設した。玉仏功德園という名称で、建物は二〇〇七年春に完成し、われわれの調査時には内装工事が進んでいた。同年の冬至から営業予定という。一階部分にはすでにモデルルームが用意され、予約受付を始めている。先の玉仏功德樓の木製ロッカーに比べると、現在予約中のものは、素材、デザインとも格段に豪華になっている。料金はモデルルームのもので一個が二万六千八百元。管理費は一年につき購入価格の1%で、五年ごとに払う。部屋によっては家族を一緒に入れられる大きなロッカーも用意され、すべてが完成すればロッカー数は全部で二万個くらいになるといふ。

報国寺にこうした遺灰収納施設があることは、まだ一般にはそれほど知られていない。別会社ということもあって、寺の紹介パンフレットにも載っていない。墓地・墓園の広告はテレビなどのマスメディアで宣伝することが法令で禁じられているため、口コミやインターネットなどに頼るしかない。しかし、これが当寺の収入の大きな目玉になっていることは間違いなく、ここには現代中国の都市における墓不足という問題も反映されている。

結語

最初に述べたように、一連の調査は現在も継続中であり、本稿はその中間報告、ないしは問題提起の段階

にすぎない。とくに筆者が最も解明したい民衆の宗教的ニーズ（先に「としてあげたファクター」を明らかにするために、居士と総称される（現在では）女性を中心とした信徒組織の実態把握、参詣客の実践や意識にふみこんだ調査などが不可欠である。居士を対象に寺院で開かれる經典読誦の会などでは、墮胎・麻薬・ポルノなど現代人のモラルの乱れを戒める説法なども行なわれる。現代中国における仏教復興の全体像をとらえるには、本稿で主題としたような儀礼・実践面だけでなく、こうした倫理面の役割にも目を配る必要がある。これらは今後の課題、ないしは若手の研究者たちに託すとして、とりあえず最後に、現時点において筆者の視点からとくに重要と思われる注目点を、四項目にまとめて提示しておく。

一、近年の中国における仏教復興の要因として、政策面の優遇措置や規制緩和といった政治的要因や、富裕層の増加といった経済的要因が大きな場を占めていることは確かである。しかし、その根底には、現世での除災招福と来世での善処の獲得という庶民の根強い宗教的ニーズがある。「冥陽兩利」などの標語に代表されるこのニーズの高さは、多くの寺院にみられる萬仏堂と功德堂（位牌堂）の建設ブームなどからも例証される。

二、市場経済化のなかで、各寺院では、旧来の慣習を基盤としつつも、独自の「商品開発」ともよべるような創意工夫への取り組みが見られる。こうした傾向に対しては、市民の噂話を含めて批判的な意見も出ている（僧侶の妻帯の現状など）。今後の寺院発展には、社会的批判に後押しされた政府機関による宗教政策の動向と、仏教界内部の改革運動という、両面からの批判的圧力への対応が大きな課題になる。

三、とくに寺院経済を支える主要な儀礼の大半が、死者を高い地位に押し上げることが目的とした「死者供

養（超薦往生・超度・薦度）」と深く結びついている。ここには儒教的な孝の伝統とともに、未練をもった不安定な死者（孤魂野鬼、無祀孤魂）を災因とする民衆信仰的な要素が流れ込み、この両面が巧みに包摂されている。⁽¹³⁾

四、こうした広義の「死者供養仏教」の隆盛は、たんに旧来の伝統の復興とか残存現象といった解釈だけでは十分にとらえきれない。社会主義革命と改革開放経済という二つの大きな変革を経験した沿岸部の大都市住民にとっては、父系血縁原理を基盤とした農村型の祖先祭祀とは別に、「計画生育政策（いわゆる一人っ子政策）」などにより小規模化している核家族の死者への供養行為が、ますます切実で重要な課題になりつつある。大寺院の功德堂に納められた位牌群、蓮池法会のために貼り出された一年期の紙位牌群、新たに増設される壁葬（ロッカー式）の遺灰堂、などの事例には、こうした社会の「私事化」に対応した新たな宗教的ニーズが映し出されている。

すでに触れたように、筆者自身としてはとくに三と四のテーマを、東アジア地域の社会変化に着目しつつ、これに関心をもつ研究者たちの協力を得ながら深めたいと思っている。たとえば「死者供養」の新たな興隆現象は、近年の韓国にもみられる。この問題を扱った川上新二氏によれば、中村元氏のような影響力の強い碩学が「韓国では祖先崇拜や葬式は仏教と関係ない」と決めつけたことが、その後の実態調査の停滞を招いたという。⁽¹⁵⁾ これはアカデミーに蔓延した権威主義の弱点を衝く、きわめて重要な指摘である。

たしかに死の直後の「葬式」という場面だけを切り取れば、檀家制度を基盤としてそこに仏教がほぼ独占的に結びついたのは、日本だけの特徴にもみえる。しかし、葬儀後に行なわれる四十九斎・一周忌などの供

養儀礼や、広く「浮かばれない死者」「不安定な先祖や死者」の清度までをも含めた「死者供養」というコンセプトでとらえれば、仏教が民衆層に定着していった共通の戦術がみえてくるはずである。中国でも民衆レベルに展開した仏教の実態に目を向ければ、すでに清朝の帝政時代において、庶民の葬礼は仏教僧たちの生計の柱だった。¹⁶ さらに檀家制度のなかった（それゆえに民衆層への仏教の定着が弱いといわれてきた）沖縄においても、近年とくに「死者供養」を大きな原動力にした仏教の浸透が指摘されている。¹⁷

もうひとつ注目しておきたいのは、こうした死者供養の担い手の多くが女性たちであるという点である。これまで東アジアの「死者供養仏教」が軽視されてきた背景としては、エリートたちによって「主張された仏教」に引きずられすぎたから、という理由のみならず、男性中心の仏教観が事態の半面を隠してきた、ということもいえるのではないか。登場人物の大半が男性であることを当然視してきた従来の「仏教研究」は、現実の熱心な在家信徒は女性であるという現実にも、あまりにも無自覚であったことも反省されるのである。

要するに、中国沿岸部のみならず、韓国、沖縄などにおいても、伝統的な地縁・血縁的秩序の衰微という社会変動のなかで、新たな「死者供養」への需要が高まってきているように思える。そして、そこには需要を積極的に支えている女性たちの存在がある。「生きられている宗教」に焦点を合わせた今後の「宗教学的」研究にとって、近年の東アジア地域における「死者供養仏教」の活性化は、興味深いテーマのひとつであり、それはまた、筆者が提唱している「比較死者供養論」の構想においても、中枢部分に位置づけられるはずである。今後、さらに調査と考察を深めたい。

注

(1) 筆者はすでに、当科研の報告書『中国東南部における市場経済化に関する調査研究』(二〇〇七年)に、「上海市における仏教復興の現状 個別寺院の事例報告」と題する論考を掲載している。これをベースに、二〇〇七年九月に立正大学で開催された日本宗教学会第六六回学術大会では、「現代中国の仏教復興」と題して口頭発表を行なった。本稿はこの発表原稿を論文に発展させたものである。したがって、内容的には、先の科研報告書と重複する部分が多く含まれていることをお断りしておく。

なお前記の共同研究は二〇〇六年度で終了したが、二〇〇七年度からは、同じく文科省科研費の共同研究『「供養文化」の比較研究を通して見る「死」の表象の形成過程とその現代的变化』(代表者・中村生雄)のメンバーとして、現地調査を継続している。

(2) 元上海市の宗教局職員の見証による。もちろん非公認の一部の宗教、たとえば法輪功やプロテスタント系の家の教会(地下教会)などは、現在でも時として厳しい弾圧を受けている。

(3) 代表的なものとして、菱田雅晴編『現代中国の構造変動』東京大学出版会、二〇〇〇年、の第九章「中国南部における仏教復興の動態」(足羽與志子)、第一章「仏教復興の政治学」(ティビット・L・ワンク)、などを参照。

(4) 「現世利益」「呪術」などの用語は、事象の本質を表示する「結論」として自己満足的に使用するとき、実につまらない概念となつて、研究者の思考を停止させてしまう。しかし、その形成過程を具体的な文脈に即して動態的に吟味していけば、創造的な思索への足場にもなる。これについては拙稿「現世利益と世界宗教」(『岩波講座・宗教』第二巻、二〇〇四年)で論じた。また、こうした研究に対する筆者の基本的視座については、『宗教学のなかの民俗・民衆宗教研究』(季刊・日本思想史)第七二号、ペリかん社、二〇

〇八年）を参照されたい。

(5) 本節の表1、表2に基づく記述は、すべて科研の共同研究者である黄強氏による次の論考に依拠している。黄強、「上海市における仏教の復興と市場経済化」(前掲の科研報告書「中国東南部における市場経済化に関する調査研究」所収)。

(6) 『聯合早報』二〇〇六年八月八日号(黄強氏からの情報提供)。

(7) 鎌田茂雄「中国の仏教儀礼」大蔵出版、一九八六年、の第一篇第八章「水陸法会」。千葉昭観「現中国で最も盛大な儀礼 水陸会」『大正大学総合仏教研究所年報』一五号、一九九三年。一九九〇年代の上海市における水陸会を報告したものととして、阿川正貫「『水陸会』の現況及び一考察」『仏教文化研究』浄土宗教学院、四五号、二〇〇一年。

(8) 鎌田茂雄(前掲書)、第一篇第二章「大悲懺法」。

(9) マイロン・L・コーエン「魂と救済 中国民間宗教における背反する主題」ワトソン、ロウスキ編『中国の死の儀礼』平凡社、一九九四年。

(10) 野村伸一編著『東アジアの祭祀伝承と女性救済 目連救母と芸能の諸相』風響社、二〇〇七年、一三〇頁。

(11) 鎌田茂雄「中国の寺・日本の寺」東方書店、一九八二年、二二頁。

(12) 中国の火葬は日本のように骨の形を残さず、完全に灰にしてしまう。したがって日本で一般的な「納骨堂」という名称ではなく、「遺灰堂」という用語を用いておく。正確には「遺骨灰堂」というべきかもしれない。

(13) こうした特性の宗教史的な意味については、『死者の救済史』角川書店、二〇〇三年、「死者の救済」中村生雄編『思想の身体 死の巻』春秋社、二〇〇六年、などで論じた。

- (14) とくに福建・広東省などで顕著な旧来型の祖先祭祀の復興については、瀬川昌久『中国社会の人類学』世界思想社、二〇〇四年の第五章「現代における宗族の復興」。
- (15) 川上新二「韓国における仏教と死者儀礼の近年の動き」朝倉敏夫・岡田浩樹編『グローバル化と韓国社会』国立民族学博物館調査報告六九、二〇〇七年。
- (16) スーザン・ナキヤーン「華北の葬礼」『中国の死の儀礼』（前掲）。
- (17) 驚見定信編『沖縄における死者慣行の変容と「本土化」』那覇市周辺地域における実態調査』（平成一六年度）一八年度科学研究費研究報告書（大正大学、二〇〇七年）。